

# 紀元千年以前における聖アニアヌス崇敬の展開

——都市における地方的聖人の崇敬形態——

多 田 哲

## 問題の提起

西ヨーロッパの聖人崇敬の展開については、おおよそ次のようなクロノロジーが認められている<sup>(1)</sup>。聖人崇敬は初期キリスト教時代から存在したとされ、殉教者に崇敬が集まった。しかし4世紀にローマ帝国内でキリスト教が公認されると、殉教者は激減することになる。それにともなって聖人概念が拡大し、禁欲実践者などの証聖者が、崇敬の対象に加えられた。ただし、このころまでのアルプス以北では、聖人崇敬の慣習はローマ都市にほぼ限定されていた。西ヨーロッパ全域で、この慣習が一般化するのには、5世紀以降である。西ヨーロッパ改宗の本格的開始にともない、農村部にも聖人崇敬が拡大したのである。そこでの崇敬のおもな対象は、ガリア諸都市の初期の司教や、農村への布教に寄与した伝道者であり、いずれも土地ごとに人気のあった地方的な聖人だった。さらに9世紀には、カロリング朝のもとで、社会における聖人崇敬の役割の拡大に拍車がかかった。このころには、東西ヨーロッパの聖人崇敬の様相に、顕著な相違が生じていた。ビザンツ帝国では、聖人崇敬の物理的な核が聖画像であった。それに対し西ヨーロッパでは、聖画像には興味は示されず、聖人の遺骸そのものである聖遺物が崇敬の核であった。

---

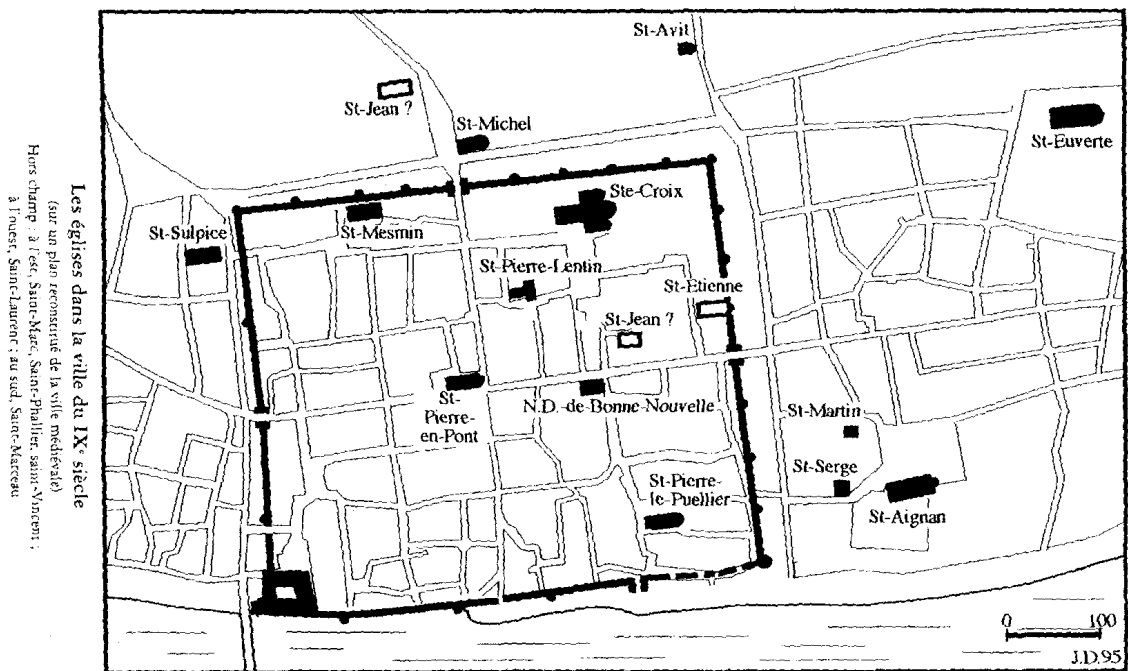
(1) 註(96)で挙げる文献を参照。

11-12世紀に、教皇を頂点とする汎ヨーロッパ的なカトリック教会が確立すると、ローマ教会の権威を体現する普遍的・国際的聖人への崇敬が台頭した。聖母、十二使徒やローマ時代の殉教者などがそれであり、従来の主流であった地方的聖人の人気に食い込んでいった。この動きにともない、ローマ、エルサレム、コンポステラの三大巡礼地を中心として、国際的巡礼の発展がみられた。しかしカトリック世界が動揺する中世末期には、聖人崇敬も大きな曲がり角を迎える。地方的、国際的を問わず、伝統的な聖人がその聖性を徐々に喪失していった。そして16世紀に入り、宗教改革によりカトリックの普遍的支配権が崩壊すると、この動きは決定的になった。中世カトリック的な聖人崇敬は、これをもって終焉を迎えたといえる。その後もフランスで聖ディオニシウス、イングランドで聖ゲオルギウスが敬愛されるなど、国家的な聖人は出現した。しかしそれは国民国家形成の象徴としての存在であり、もはや中世的な色彩はそこにはない。

以上のような大きな流れのなかで、紀元千年は1つの分岐点をなしているといえよう。そこで本稿では、聖アニアヌス崇敬を例として、紀元千年に至るまでの聖人崇敬の形成過程およびその背後の事情を明らかにしたい。換言すれば、聖人崇敬発展史のなかに、アニアヌス崇敬を位置づけることが、本稿の目的である。アニアヌスは5世紀中期のオルレアン司教である。後述するように、彼に対する崇敬の痕跡は、オルレアン司教区の範囲を超え、広くフランス中に確認されている。しかし彼が司教として活躍し、葬られた都市オルレアンにとっては、まさにわが町随一の地方的聖人であった。アニアヌスの聖遺物を保持していたのは、都市東部に位置するサン＝テニャン（聖アニアヌス）聖堂であり、ここが崇敬の焦点となっていた（地図参照）<sup>(2)</sup>。そこで本稿では、崇敬の形成過程を解明するにあたり、オルレアン市内の諸事情に限定して考察をおこなう。その結果、都市における地方的聖人の崇敬形態が、明らかになるであろう。

---

(2) 本稿では教会の建物を示す語として「聖堂」を、組織を示す語としてのみ「教会」を用いることとする。



地図 9世紀の都市オルレアン

典拠：J. Debal, *Cenabum-Aurelianis-Orléans* (Lyons, 1996) p.129.

本稿の問題設定に関係する先行研究は少なくない<sup>(3)</sup>。しかし直接関連するものとしては、さしずめ次の2人の研究者を挙げれば足りるだろう。

T・ヘッドは1990年に、『聖人伝と聖人崇敬——800年から1200年までのオルレアン司教区——』と題する研究を発表した。この研究は、現時点

(3) ただし、アニアヌス崇敬およびサン＝テニャン教会そのものについての大部の研究は、近年は存在しないようである。オルレアンおよびサン＝テニャン教会に関する代表的な研究としては（後述するものを除く）、R. Hubert, *Antiquitez historiques de l'église royale Saint-Aignan d'Orléans* (Orléans, 1661); S. Guyon, *Histoire de l'église et diocèse: Ville et université d'Orléans*, 4 vols (Paris, 1647-1650); C. F. Vergnaud-Romagnési, *Histoire de la ville d'Orléans* (Orléans, 1830; repr. [n. p.], 1996); J.-B. C. Patron, *Département du Loiret: Dictionnaire des communes*, 2 vols (Paris, 1991); R. Biémont, *Orléans* (Orléans, 1880; repr. [Paris], 1991); E. Bimbenet, *Histoire de la ville d'Orléans*, 5 vols (Orléans, 1884-1888; repr. Brussels, 1976); R. Crozet, *Histoire de l'Orléanais* (Paris, 1936); L. d'Illyers, *Histoire d'Orléans racontée par un Orléanais*, 2nd edn (Orléans, 1954; repr. Marseilles, 1986); *Histoire religieuse d'Orléanais*, ed. by J. de Vignerie (Chambray-lès-Tours, 1983).

でのオルレアン司教区の聖人崇敬研究の集大成といえる。彼は、オルレアン司教区の地方的諸聖人のアイデンティティを検討した。その結果、地方的聖人は形を変えつつも、9世紀から12世紀の間、パトロネジを発揮し続けていたことが明らかになった。地方的聖人を検討の対象にしているという点で、ヘッドの研究と本稿は問題関心を共有している。彼はアニアヌスなどの司教聖人の聖人伝の特徴を、次のように整理した。オルレアンでは、アキテーヌと違って同時代のほかの司教についての描写が明確ではない。また東フランクとも違って、司教と教皇との関係も、問題にされていない。オルレアン司教の聖人における「もっとも重要なメッセージは、司教座のパロンたちが緊密な関係を形づくり、神の摂理が彼らの執り成しを通じて、直接に示されたことである」<sup>(4)</sup>。しかしながらヘッドは、このようなイメージが出現した背景については、本格的な検討をおこなっていない。またイメージそのものの分析についても、さらに詳細におこなう必要があるだろう。

アニアヌス崇敬そのものについては、G・ルノーの諸研究がある<sup>(5)</sup>。彼女は第1に、崇敬の核となった聖人伝群、およびその写本を特定し、さらに各聖人伝の執筆年代について推定をおこなった。第2に、フランス内外におけるアニアヌス崇敬の痕跡を調査した。崇敬はフランスの外までは拡大していないものの、広くフランス中に伝播していたことが明らかになった。ルノーは「聖アニアヌスに対する信心——典礼と地名——」(1980年)

---

(4) T. Head, *Hagiography and the Cult of Saints: The Diocese of Orléans, 800-1200* (Cambridge, 1990), esp. p. 107.

(5) G. Renaud, 'Saint Aignan d'Orléans a-t-il été vénéré hors de France?', *B[ulletin de la] S[ociété] A[rchéologique et] H[istorique de l']O[rléanais]*, n.s. 49 (1978), 110-113. そのほかに、註(6), (8), (29), (58)で挙げる彼女の研究を参照。本稿で言及するアニアヌス関連の書簡や聖人伝の執筆年代は、彼女の見解にしたがっている。また崇敬の伝播については、J・シャルルの先駆的研究がある。J. Charles, 'Le culte de saint Aignan hors du diocèse d'Orléans', *BSAHO*, n.s. 16 (1962), 254-255.

と題する論文で、2つの面からアプローチをおこなった<sup>(6)</sup>。まず彼女が注目したのが、8-15世紀に作成された典礼書(聖務日課書, 時祷書などを含む)である。古い写本の散逸の可能性があるため、正確な状況把握が困難としながらも、そこではアニアヌスに対する礼拝が、中世を通じてフランス中でおこなわれていたことが示された。次に注目されたのが、聖堂などの守護聖人名および地名である。彼女によれば、フランスには「サン＝テニャン」もしくはその変種を地名に持つ場所が52ヶ所、聖アニアヌスに捧げられている聖堂や泉などを持つ場所が168ヶ所にわたって存在する(重複を除くと合計192ヶ所)。このような2つのアプローチから、ルノーは次のように結論した。アニアヌス崇敬は、ブルターニュを除くフランスの北半でとりわけ盛んであった。その中心はオルレアン、ブールジュ、シャルトルの3司教区であった。

本稿の問題関心に照らし合わせると、ルノーの諸研究には別の意義も存在する。通常アニアヌス崇敬の発展史のなかでは、紀元千年以降の時代が注目される。1000年ころに、カペー朝ロベール(敬虔王)2世の保護下でサン＝テニャン聖堂の規模拡張がおこなわれ、1029年に献堂式が举行された。中世を通じて何度も改築されたこの新聖堂は、数々の伝承の焦点となる<sup>(7)</sup>。しかし彼女は、それ以前の時代に注目した。聖人伝を検討した結果、「聖アニアヌスに関する伝承は、10世紀末あるいは遅くとも11世紀初頭までに、その最大の発展に到達していた」<sup>(8)</sup>。他方、典礼での礼拝という観点からは、すでに8世紀の時点でアニアヌス崇敬の拡散がみられる。だがルノーはさらに、典礼書よりも地名の方が、古い状態を示していると考え。それゆえ、アニアヌス崇敬はメロヴィング期以来、継続的に発展

(6) G. Renaud, 'La dévotion à saint Aignan: Liturgie et toponymie', *BSAHO*, n.s. 51 (1980), 17-32.

(7) *Miracula s. Aniani* (*BHL* 476d), ed. by G. Renaud, in *A[nalecta] B[ollandiana]*, 94 (1976), 256-274; *Passio [et translatio] sancti Baudelii* (*BHL* 1044d and e), ed. by G. Renaud, in *AB*, 96 (1978), 160-166.

(8) G. Renaud, 'Les miracles de saint Aignan d'Orléans, XI<sup>e</sup> siècle', *AB*, 94 (1976), 245-274, esp. 253.

してきたと結論した。このようにルノーは、アニアヌス崇敬の証拠を見事に示してくれた。しかし、崇敬の形成ないしは高揚の過程やその背後の事情については、ほとんど触れられていない。したがって本稿の成果は、このような先行研究の間隙を、いくぶんでも埋めることができるだろう。

## 第1章 聖アニアヌス崇敬の形成と発展

本章では、紀元千年に至るアニアヌス崇敬の形成と発展を時代順に概観する。オルレアン司教アニアヌスの事績のなかで、事実として確認されていることは1つしかない。451年にアッティラ麾下のフン族の軍勢がオルレアンを包囲した際、都市の防衛にあたって重要な役割を果たしたというのがそれである。聖人伝の記述によれば、彼はヴィエンヌ出身で、オルレアンに到来後、まずは都市西部郊外のサン＝ローラン聖堂の司祭に叙任された。司教叙任後、第2章で述べるようないくつかの事績をなし、フン族のオルレアン包囲から2年後に死去した。その遺骸は、サン＝ローラン聖堂に葬られ、まもなく彼に対する崇敬が高まったとされる<sup>(9)</sup>。

アニアヌスの事績についての最古の証言は、シドニウス・アポリナリスの書簡である<sup>(10)</sup>。それは当時のオルレアン司教プロスペルの求めに応じて、478/479年に執筆された。そして聖人伝の記述によれば、アニアヌスが死去してから「永年の後に、オルレアン・キヴィタスの東の地に、すばらしい神殿が建設された。[それは]金銀宝石によって飾られて輝いていた。[そこに]彼の聖なるお体が奉遷された」<sup>(11)</sup>。この「すばらしい神

(9) 註(10), (28)参照。

(10) Sidonius Apollinaris, *Letter to Prosper of Orléans*, ed. by C. Lütjohann, in *MGH AA*, VIII, p. 147, VIII, 15.

(11) [VA 2] *Vita s. ac beatissimi Aniani episcopi et confessoris* (BHL 474), ed. by A. Thénier, in *Saint-Aignan, ou le siège d'Orléans, par Attila: Notice historique suivie de la vie du saint, tirée des manuscrits de la bibliothèque du roi* (Paris, 1832), p. 33, § 9: 'multorum curriculis annorum labentibus ad orientalem plagam civitatis Aurelianensium, extracto templo mirifico,

殿」を同定する直接の証拠はないが、現在のサン＝テニャン聖堂の位置に存在したと考えて差し支えないだろう<sup>(12)</sup>。聖人伝作者は奉遷の時期を明確にしていない。しかしオルレ안의古い著作家たちは、それをクローヴィス1世期(481-511年)だと考えてきた<sup>(13)</sup>。その推定が正しいとすれば、それは最初の聖人伝が執筆された時期と一致する。『第1聖アニアヌス伝』(VA1)は、5世紀末から6世紀初頭までの間に執筆されている<sup>(14)</sup>。

そして遅くとも6世紀には、アニアヌスの聖遺物を納める聖堂が、聖人の名を冠されて呼ばれていた。トゥール司教グレゴリウスは『歴史十卷』のなかで、オルレアン司教ナマティウスの死去について、次のように語っている。「司教ナマティウスは……アンジューの領域のなかで息をひきとった[587年]。かれの遺骸はかれの町へ運ばれ、証聖者聖アニアヌスの聖堂に葬られた」<sup>(15)</sup>。また6世紀に執筆された『聖ジュヌヴィエーヴ伝』や『パリ司教聖ゲルマヌス伝』でも、聖アニアヌスの名を冠した聖堂が言及されている<sup>(16)</sup>。7世紀に入ると、サン＝テニャンはガリアを代表する墓廟

---

argento et auro gemmisque fulgentibus exornato, [...] sanctum corpus illius translatum est'.

(12) J.-M. Berland, 'Saint-Pierre-aux-Boeufs, Une église orléanaise fantôme', *BSAHO*, n.s. 49 (1978), 79-82.

(13) R. Biémont, *La collégiale de Saint-Aignan d'Orléans* (Orléans, 1876), p. 11; E. Sejourné, *Les reliques de saint Aignan, évêque d'Orléans: Histoire et authenticité d'après les documents originaux et inédits* (Orléans, 1905), p. 7.

(14) [VA1] *Vita Aniani episcopi Aurelianensis* (BHL 473), ed. by B. Krusch, in *MGH SRM*, III, pp. 104-117.

(15) トゥールのグレゴリウス『歴史十卷(フランク史)Ⅱ』兼岩正夫、臺幸夫訳註(東海大学出版会、1977年)、322-325頁、9巻18: 'Namatius vero episcopus [...] infra Andegavensis territorii terminum spiritum exalavit. Corpusculum eius ad urbe sua dilatum, in basilicam sancti Aniani confessores sepultum est.'

(16) *Vita Genovefae virginis Parisiensis* (BHL 3335), ed. by B. Krusch, in *MGH SRM*, III, pp. 204-238, esp. 232, c.42; Venantius Fortunatus, *Vita Germani episcopi Parisiaci* (BHL 3468), by B. Krusch, in *MGH SRM*, VII, p. 413, c. LXVII. 言われているように『聖ジュヌヴィエーヴ伝』が6世紀初頭の

として知られるようになる。クロテール2世は626-627年に、宮宰ワルナケールの息子ゴダンに対し、聖遺物にかけて誠実宣誓を求めた。サン＝テニャンは、サン＝ドゥニ、サン＝メダール（ソワッソン）、サン＝マルタン（トゥール）の各聖堂とともに、その際に彼が送致された墓廟の1つであった<sup>(17)</sup>。7世紀中期になると、アニアヌスの聖遺物を奉じる組織についての言及がみられるようになる。このころ、サン＝テニャンは修道士たちによって運営されていた。彼らはベネディクトゥス戒律とコルンバヌス戒律の混合戒律にしたがって、共同生活をおこなっていたようである<sup>(18)</sup>。

カロリング期になると、シャルルマーニュとオルレアン司教テオドルフスから手厚い保護を受けた。この行為は、聖堂の再建ないしは拡張を含んだと考えられている<sup>(19)</sup>。それは単に、物理的な復興にとどまるものではない。聖遺物をいただく聖堂は、それ自体がひつぎの延長と見なされる。

---

作だとすると、これがサン＝テニャン聖堂の最古の証言であり、すでに5世紀の時点でそう呼ばれていた可能性を示唆する。

(17) *Chronicarum quae dicuntur Fredegarii Scholastici Libri IV cum Continuationibus*, ed. by B. Krusch, in *MGH SRM*, II, p. 147, IV, c. 54.

(18) *Histoire d'Orléans et de son terroir*, I: *Des origines à la fin du XVI<sup>e</sup> siècle*, ed. by J. Debal (Roanne, 1983), p. 215; L. Gaillard and J. Debal, *Les lieux de culte à Orléans de l'Antiquité au XX<sup>e</sup> siècle* (Orléans, 1987), p. 17; Head, pp. 22-23; J.-C. Picard, 'Orléans', in *Topographie chrétienne des cités de la Gaule des origines au milieu du VIII<sup>e</sup> siècle*, VIII: *Province ecclésiastique de Sens (Lugdunensis senonia)* (Paris, 1992), p. 91. 註(76)参照。

(19) Sejourné, p. 14; *Histoire d'Orléans et de son terroir*, I, pp. 225-226; M. de La Fournière, 'Histoire de l'Ile Charlemagne à Orléans', *BSAHO*, n.s. 71 (1985), 31-37. カロリング期の工事は推定されてはいるが、考古学的あるいは建築学的には証明されていない。J. Banchereau, 'Église Saint-Aignan', in *Congrès archéologique de France, XIII<sup>e</sup> session tenue à Orléans en 1930*, ed. by Société française d'archéologie (Paris, 1931), pp. 52-70; P. Rousseau, 'La crypte de l'église Saint-Aignan d'Orléans', in *Études ligériennes d'histoire et d'archéologie médiévales: Mémoires et exposés présentés à la semaine d'études médiévales de Saint-Benoît-sur-Loire du 3 au 10 juillet 1969*, ed. by R. Louis (Auxerre; Paris, 1975), pp. 454-473. カロリング期の各司教の任期は、第3章第2節参照。



したがって聖堂の再建や拡張は、聖人崇敬の高揚と不可分の関係にあるのだ。またテオドゥルフスはおそらく813年以前に、聖職候補者を「サント＝クロワ〔司教座〕聖堂，サン＝テニャン，サン＝ブノワ〔フルーリ〕，サン＝リファール〔ムン＝シュル＝ロワール〕修道院あるいはそのほかの庵にある学校に送る」よう定めている<sup>(20)</sup>。したがって，サン＝テニャンはほかの3修道院と並んで，当時のオルレアン司教区を代表する宗教的組織であったと考えられる。共同体は，聖遺物の単なる番人ではなくなっていたのである。そしてついにサン＝テニャンは，カロリング皇帝からの尊敬をも獲得する。ルイ（敬虔帝）1世は2度にわたってサン＝テニャンに参詣し（814および818年），818年にはみずからの加護をアニアヌスの聖遺物に祈っている<sup>(21)</sup>。この間，816-817年のアーヘン教会会議の決議を受け，サン＝テニャンの共同体は，聖堂参事会戒律の採用を決めたと考えられる。したがって厳密な意味においては，この時期以降のサン＝テニャンは「修道院」ではなくなるのである<sup>(22)</sup>。9世紀前半には，アニアヌスの生涯に関

(20) Theodulf of Orléans, *Capitula* I, ed. by P. Brommer, in *MGH Cap episc*, I, pp. 115-116, c. XVIII: 'ad scolam mittere, in ecclesia sanctae Crucis aut in monasterio sancti Aniani aut sancti Benedicti aut sancti Lifardi aut in ceteris de his coenobiis'. ここでは学問センターとして知られるフェリエール修道院が，言及されていない。同院は聖遺物を保持しない共同体だった。そこになんらかの因果関係があるかは不明である。Head, pp. 26-27, n. 35 参照。

(21) Ermoldus Nigellus, *Poème sur Louis le Pieux et épitres au roi Pépin*, ed. and trans. by E. Faral, 2nd edn (Paris, 1964), pp. 62 and 118, lines, 791 and 1536-1539.

(22) Ansegisus of St Wandrille, *Testamentum*, ed. by F. Lohier and J. Laporte, in *Gesta sanctorum patrum Fontanellensis coenobii (Gesta abbatum Fontanellensium)* (Rouen; Paris, 1936), p. 113, XIII, 7. 以下参照。 *Histoire des Pays de la Loire: Orleanais—Touraine—Anjou—Maine*, ed. by F. Lebrun (Toulouse, 1972), pp. 101-102; J. Semmler, 'Mönche und Kanoniker im Frankenreiche Pippins III. und Karls des Großen', in *Untersuchungen zu Kloster und Stift* (Göttingen, 1980), pp. 85-87; Picard, 'Orléans', p. 92. ただし聖堂参事会戒律採用の時点で，「参事会」なる組織が存在していたかどうかは明確ではない。したがってそれ以降のサン＝テニャンを，本稿では単に

する記述を含む、2点の聖人伝が執筆されている（『第1聖エウルティウス伝』（VE1）および『第2聖エウルティウス伝』（VE2））<sup>(23)</sup>。いずれも司教座教会参事会員の作と考えられ、後者の作者は副助祭ルキフェルスと名乗っている<sup>(24)</sup>。

9世紀後半に入っても、アニアヌスの名声は衰えない。854年にサン＝テニャン教会は、オルレアン東部郊外に新しい墓地を建設する許可を、オルレアン司教アギウスから得ている。このことは、アニアヌスの近くで永眠したいという人々が増加し、聖堂付属の墓地が手狭になったことを意味する。しかしランス司教ヒンクマルスの『サン＝ベルタン年代記』によれば、865年のヴァイキングのロワール河畔襲撃にともない、ほかの宗教施設ともどもサン＝テニャン聖堂も焼失した<sup>(25)</sup>。このような状況のなか、オルレアン司教ワルテリウスは870年ころ、司祭に対して次のような命令を出した。「祝福すべき聖人たちの祝日を、厳粛な尊敬をもって、遵守しなければならない。そして民衆たちに遵守させるべきこと〔祝日〕を、早

---

「教会」と呼ぶことにする。小野賢一「聖堂参事会改革期における修道会・律修修道会対立の図式」『史友』第29号（青山学院大学，1997年），61-79頁参照。

(23) [VE1] *Vita sancti Evurtii episcopi [Aurelianensis]* (BHL 2800), ed. by Bollandists, in *Catalogus codicum hagiographicorum latinorum antiquiorum saeculo XVI qui asservantur in bibliotheca nationali Parisiensis*, II (Brussels, 1890), pp. 312-319; [VE2] Lucifer of Orléans, *Vita fabulis foedata s. Evurtii* (BHL 2799), ed. by J. Stillingus, in AASS, Sept. III, pp. 52-59.

(24) 多田哲「カロリング期ヨーロッパにおける聖人と社会——聖エウルティウス崇敬と都市オルレアン——」『歴史学研究』第755号（2001年）。

(25) Agius of Orléans, *Diploma*, ed. by R. Boucher de Molandon, in *Mémoires de la Société Archéologique et Historique de l'Orléanais*, 11 (1868), 482-489; Hincmar of Rheims, *Annales Bertiniani, pars tertia*, ed. by F. Grat, J. Vielliard, and S. Clémencet, in *Annales de Saint-Bertin* (Paris, 1964), p. 117, a. 865. ただしサント＝クロワ司教座聖堂のみが、焼失をまぬがれた。

く覚えなければならない」<sup>(26)</sup>。遵守すべき祝日のなかには、聖アニアヌスの祝日も含まれていた。オルレアンの古い作家たちは、このころシャルル（禿頭王）2世が聖堂を再建したと述べるが、十分な証拠はない。いずれにせよこの聖堂も、989年にオルレアンを襲った大火に巻き込まれたと思われる<sup>(27)</sup>。またこの時期には、アニアヌスを主人公とする、2点の新しい聖人伝が執筆された（『第2聖アニアヌス伝』（VA2）および『第3聖アニアヌス伝』（VA3））<sup>(28)</sup>。前者は9世紀後半、後者は9世紀後半－10世紀に、いずれもサン＝テニャン教会参事会員によって執筆されたと考えられる。

前述のように、ルノーはアニアヌス崇敬の継続的発展を推測した。本章でおこなった考察は、その印象をさらに強めることとなった。そのなかで急速な発展を経験した時代を挙げるとするなら、9-10世紀であろう。この200年間には、諸勢力による保護・振興策や聖人伝の執筆が集中している。その影響であろうか、アニアヌスの伝承を含む聖人伝写本が、各地で盛んに作成されている<sup>(29)</sup>。

最古のものは、ヴァティカン図書館所蔵の手稿本 Reg. lat. 585 である。この写本は由来、作成年代、サイズを異にする複数の断片を綴じたもので、一部はサン＝テニャン教会、一部はフルーリ修道院に由来する。このうち

(26) Walter of Orléans, *Capitula*, ed. by P. Brommer, in *MGH Cap episc*, I, p. 191, c. XVIII: 'Ut celebres sanctorum festivitates sollempni cultu observent et observandas suis plebibus antea cognitent'. 註(85)参照。

(27) Biémont, *La collégiale*, pp. 12-13; Sejourné, p. 16; *Histoire d'Orléans et de son terroir*, I, p. 246.

(28) VA 2, pp. 27-33; [VA 3] *Sermo de adventu s. Aniani episcopi* (BHL 476), ed. by A. Thénier, in *Saint-Aignan, ou le siège d'Orléans*, pp. 34-36.

(29) VA 1, pp. 106-107; G. Renaud, 'Les traditions de l'Eglise d'Orléans sur ses saints évêques Euverte et Aignan: Vies, miracles, culte', *Annuaire de l'école pratique des hautes études*, 4th section (1972-1973), 745-752, esp. 747; Renaud, 'Les miracles', 245-252; J. van der Straeten, *Les manuscrits hagiographiques d'Orléans, Tours et Angers* (Brussels, 1982), pp. 45 and 128.

9世紀に作成された断片にVA2が、また10世紀に作成された断片に、VE2が含まれている<sup>(30)</sup>。VA1の写本のなかで、現存する最古のものが作成されたのも、この時期である。それを含むパリ国立図書館所蔵の手稿本Lat. 11748(10世紀)は、サン＝モール＝デ＝フォッセ修道院(パリ近郊)に由来する。また、オルレアン市立図書館所蔵の手稿本197(10世紀)は、VA3を含み、フルーリ修道院に由来する。そのほかに10世紀に作成された可能性のあるものとしては、以下の写本があげられる。ミュンヘン、バイエルン国立図書館所蔵手稿本Clm. 18546(10-11世紀)、トゥール市立図書館所蔵手稿本1013(10-11世紀、マルムティエ修道院(トゥール)に由来)、パリ、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館所蔵手稿本Lat. 3013(10末-11世紀初頭)がそれである<sup>(31)</sup>。

## 第2章 聖アニアヌスのイメージ

本章では、紀元千年までに形成された、アニアヌスの聖人としてのイメージを、4つに大別して検討する。第1に、治癒奇蹟をおこなう者としてのそれである。アニアヌスは4回の治癒奇蹟をおこなっている<sup>(32)</sup>。①オルレアンで司教座聖堂の増改築がおこなわれていたころ、棟梁ニエリウス(あるいはメリウス)が建築現場で足を滑らせて正気を失い、絶命すると思われた。アニアヌスは十字架をかざすことで、彼の健康を回復させた。

(30) Vatican, Biblioteca Apostolica Vaticana, reg. lat. 585, fols 33<sup>r</sup>-35<sup>v</sup> and 59<sup>r</sup>-66<sup>v</sup>. Reg. lat.シリーズは500番までしかカタログが作成されていないため、同写本に関する情報は少ない。由来に関する情報は、ヴァティカン図書館保管のカード目録による。

(31) Paris, Bibliothèque nationale, lat. 11748, fols 70<sup>r</sup>-73<sup>r</sup>; Orléans, Bibliothèque municipale, 197, fols 117-119; Munich, Bayerische Staatsbibliothek, clm. 18546, fols 91<sup>r</sup>-97<sup>v</sup>; Tours, Bibliothèque municipale, 1013, fols 293<sup>r</sup>-298<sup>v</sup>; Paris, Bibliothèque Ste. Geneviève, lat. 3013, fols 27<sup>r</sup>-39<sup>r</sup>.

(32) VA1, pp. 109-112, cc.2-3 and 5-6; VA2, pp. 28-30, 83-5. 紀元千年以降の聖人伝では、治癒奇蹟の種類が増加している。註(7)参照。

②ローマの軍司令官アグリピヌスがオルレアンを訪問した際、落石にあって大量に出血した。アニアヌスは傷の上で十字を切り、彼を致命傷から救った。残りの2件は、アニアヌスがアルルのガリア総督府に向かう途上での出来事である。③後にヴィエンヌ司教となる貴族のマメルトゥスは、健康を損なって衰弱し、息も絶え絶えの状態であった。アニアヌスの祈りもむなしく、彼はいったん、絶命したかに思われた。しかしアニアヌスが神の前にひれ伏して、夜を徹して祈り続けた結果、翌朝にマメルトゥスは目覚めて健康を回復した。④旅程も終わりに近づき、アニアヌスはタラスコン付近にあるエルナギヌム修道院を訪問した。同院の院長は30年来、目が不自由であったが、アニアヌスの調合した塗り薬の効用と祈りの結果、目が見えるようになった。治癒奇蹟は、ガリアの聖人伝のプロトタイプともいべきスルピキウス・セウェルス『聖マルティヌス伝』でも、しばしばおこなわれた。それ以降、聖人伝の主要なモチーフの1つになっている<sup>(33)</sup>。したがってこの点においては、アニアヌスはほかの聖人と比べて、特殊なイメージを保持しているとはいえない<sup>(34)</sup>。

第2は、囚人を解放する者というイメージである。アニアヌスは前述の

---

(33) Sulpicius Severus, *Vie de Saint Martin* (BHL 5610), trans. and ed. by J. Fontaine, 3 vols (Paris, 1967-1969), pp. 248-345; Jonas of Orléans, *Vita secunda sancti Huberti et corporis ejus translatio ad monasterium Andaginense* (BHL 3994 and 3995), ed. by C. de Smedt, in AASS, Nov. 1, pp. 806-818; *Miraculorum s. Huberti post mortem liber primus* (BHL 3996), ed. by C. de Smedt, in AASS, Nov. 1, pp. 819-823.

(34) C. A. Dupont, 'Les débuts du culte de saint Hubert à Andage', *Saint-Hubert d'Ardenne*, 8 (1991), 405; Head, pp. 168-171, 236, and 287; 佐藤彰一「聖人とキリスト教的心性の誕生」佐藤彰一、早川良弥編著『西欧中世史（上）——継承と創造』（ミネルヴァ書房、1995年）、54-59頁。他方、アイルランドの聖人伝では、大陸に比べて治癒奇蹟の占める割合が少ないという。C. Stancliffe, 'The Miracle Stories in Seventh-Century Irish Saints' Lives', in *Le septième siècle: Changements et continuités: Actes du Colloque bilatéral franco-britannique tenu au Warburg Institute les 8-9 juillet 1988*, ed. by J. Fontaine and J. N. Hillgarth (London, 1992), pp. 89, and 91-96.

アグリピヌスがオルレアンを訪問した際、囚人を牢獄から解放するよう願った。アグリピヌスはこれをいったん拒否。しかし前述のように聖人に命を救われたため、当初の願いを聞き入れて囚人を釈放した<sup>(35)</sup>。この事績も、古代末期－初期中世の聖人のイメージとしては、ありふれたものである<sup>(36)</sup>。

第3は、都市の防衛者としてのイメージである。アッティラ麾下のフン族の襲来を間近に控えたとき、アニアヌスはアルルの総督府まで足を運び、軍司令官アエティウスに防衛を依頼した。アニアヌスは、フン族のオルレアン襲来を6月14日と予言し、同日にオルレアンまで軍勢を率いてくる旨の約束を、彼から取り付けた。そしてついにフン族の軍勢がオルレアンを包囲し、攻撃を始めた。アニアヌスは、神に加護を願って祈るうちに、天佑がおこなわれることを感じた。そこで敵に向かって唾を吐きかけると、それが雨となって暴風雨が起った。そのためロワール川が氾濫し、フン族の軍勢は数日間、足止めをくらった。暴風雨が止むとフン族の侵攻が再開し、町に侵入してきた。アニアヌスは住民を励ましながらも、アエティウスの駐屯地に幻として出現し、次の日に軍勢を差し向けることを勧告した。アエティウスがオルレアンに到着して攻撃を開始すると、フン族のある者は刃に倒れ、ある者は川で溺死し、ある者は降伏した。アニアヌスはこれ以上の殺戮を回避すべく、祈りによってフン族の残党を追い払った。こうしてアニアヌスは、オルレアンの町を解放したのである<sup>(37)</sup>。

ここにみられる天候に関する奇蹟も、聖人伝のなかではありふれたエピソードである<sup>(38)</sup>。ローマ帝国の政庁を訪問して高官に陳情したことや、

---

(35) VA 1, pp. 109-110, c. 3; VA 2, p. 28, § 3.

(36) 佐藤彰一「後期古代社会における聖人・司教・民衆——中世初期司教権力の解明のための一試論——」『西洋史論叢』第5号(1983年), 3頁, Stancliffe, p. 96.

(37) 註(10)参照。VA 1, pp. 110, 112-117, cc. 4, 7-10; VA 2, pp. 29-32, § 4-9. フン族は実際には、オルレアンを迂回してアキテーヌを目指し、456年にカタラウヌムの戦いで大敗を喫する。

(38) 註(33)で挙げた聖人伝群参照。

都市を戦争から救ったことも、司教聖人の典型的な事績の1つである<sup>(39)</sup>。しかしオルレアン司教区では、アニアヌスは都市の防衛者としてのイメージを独占していた。彼が永らく称揚され、オルレアン第1の聖人でありつづけたのは、まさにこのイメージゆえである。オルレアンは先史時代以来、交通の要衝にあたっていた。その利点はオルレアンを発展させ、ケルト時代には全ガリアの宗教的中心地だったほどである。そしてローマ時代には、キヴィタスの首都となる<sup>(40)</sup>。しかしこの利点は同時に欠点ともなり、中世を通じて戦争の脅威にさらされた。シャルル・マルテルの遠征、ヴァイキングの侵攻、百年戦争の際には、いずれも軍勢の通り道となり蹂躪されたことはいうまでもない。そのたびにアニアヌスの事績が想起され、文字どおりの守護聖人として、都市オルレアンで崇敬を集め続けたのである。

第4は、聖なる手続きを経て司教になった者というイメージである<sup>(41)</sup>。アニアヌスの司教選出のエピソードは、次のようなものだった。「当時、オルレアン・キヴィタスにおいて、諸貴族の偉大なる家系が、聖職者においても俗人においても隆盛を誇っていた。そして各人が各人を、友人が友人を助けようと努めたため、司教叙階についての不一致の種が実を結び、党派が互いに敵対し始めていた」<sup>(42)</sup>。その結果、アニアヌスを含めて3人

(39) オセール司教ゲルマヌスは、アルルの総督府に赴き、租税負担の軽減を陳情した。またラヴェンナの皇帝府に赴き、オセール地方の征伐を思いとどまらせた。佐藤「後期古代社会における聖人・司教・民衆」, 7-11頁。聖女ジュヌヴィエーヴは、フン族からパリを救った。註(16)参照。

(40) カエサル『ガリア戦記』近山金次訳(岩波書店, 1964年), 197頁, 6巻13, J. Debal, *Cenabum—Aurelianus—Orléans* (Lyons, 1996), esp. p. 7. ロワール河畔の最北地点としての利点がもっとも大きい。ロワール川を航行する者は、オルレアンで陸上に上がり、ボース平原を経由してセヌ川地方に至る。

(41) VE1, pp. 318-319, cc.14-15; VE2, pp. 57-58, cc.17-19; VA2, pp. 27-28, 82; VA3, p. 36, c. 9.

(42) VE2, p. 57, c. 18: 'Illo itaque tempore, [...] in civitate Aurelianensium maxima nobilium propago florebat tam in clero, quam in populo; et dum sibi unusquisque, aut proximus aut amicis quærit opitulari, [...] dissensionis [...] semina de ordinando antistite fructificaverunt, et coeperunt sibi partes esse adversæ.'

の人物が、司教候補に名を連ねることになった。そこで現司教は、市民に解決策を提示した。

今夜、賛美歌と朗読のために集まりしわれわれは、ともに一夜を明かそう。そしてくじを受け取り、そこにわれわれは、3人の名前を1人ずつしたためよう。それらの名前は一晚中、祭壇の下に隠しておかなければならない。明朝、ミサが終わって選出のときが来ると、われわれは、無垢な幼児を連れてこよう。

まさに彼が、祭壇から前述のくじを引くのだ<sup>(43)</sup>。

そして司教の指示どおりに事が運ばれ、「ほぼ3歳で、無垢で、文字の読めない幼児」が、アニアヌスの名が書かれてある1枚のくじを選び取った<sup>(44)</sup>。そして彼は「あたかも預言者のように、声高に呼び始め、歓呼して述べた。『アニアヌス、アニアヌス、アニアヌス。誉れ高く、今このキヴィタスで、唯一司教位にふさわしい者よ』」<sup>(45)</sup>。この幼児の声が、神の意志と一致しているかを確認するためには、聖書が使われた。無作為に詩編を開くと「いかに幸いなことでしょう／あなたに選ばれ、近づけられ／あなたの庭に宿る人は」という一節が、使徒書を開くと「イエス・キリストという既に据えられている土台を無視して、だれもほかの土台を据えることはできません」という一節が、福音書を開くと「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できな

(43) VE2, p. 58, c. 18: 'hac nocte unanimiter congregati in hymnis ac lectionibus excubemus; et accepta chartula, nomina trium singillatim indamus, quæ nomina sub altari tota nocte sint delitentia, peractis electo tempore crastina die Missis, puerulum innocentem adducamus, qui præfatas chartulas de imo altaris retrahat'.

(44) VE1, p. 319, c. 15: 'puerulus fere annorum trium, rudis et sine litteris'.

(45) VE2, p. 58, c. 19: 'tanquam propheta vociferari coepit, clamans et dicens: Anianus, Anianus, Anianus, honore solus in hac nunc civitate dignus est episcopatu'. J=C・シュミットは、アニアヌスを歓呼した声の主を、民衆だと考えている(註51参照)。しかしいずれのテキストも、そのようには解釈できないと思われる。ここで重要なことは、ことばもおぼつかない幼児が、アニアヌスの名を呼んだことであり、その点からも矛盾が生じる。



い」という一節があらわれた<sup>(46)</sup>。これらをもって一同は、神の意志を確認した。「今やわれわれは、この選出が神によってなされたことを知った。それゆえわれわれは願う。そのお方〔アニアヌス〕が、キリストが予定した司教になることを」<sup>(47)</sup>。そしてアニアヌスが正式に、司教に指名された。

アニアヌスに投影された4つのイメージのなかで、第4のそれが注目に値する。というのも、ほかの3つのイメージは、5世紀末から6世紀初頭までの間には出そろっている。それに対して第4のイメージのみが、9-10世紀になって新たに形成されたものだからである。そして逆に、この時期に執筆された聖人伝は、もれなくこのイメージをアニアヌスに投影している。すでに第1章で指摘したように、アニアヌス崇敬は9-10世紀に大きな発展を経験したと考える。それは単に量的に発展したのではなく、質的にも変貌をとげていたのである。

ところでアニアヌスが選出される際に用いられた方法は、「聖人の占い」あるいは「使徒の占い」などと呼ばれていた。オルレアン司教区では、アニアヌスが独占するイメージである。しかしガリアを見渡すと、彼がその方法によって司教に登位した最初の人物ではない。マルティヌスも「占い」を経て、トゥール司教に選出されている<sup>(48)</sup>。したがって、アニアヌスの第4のイメージは、単にプロトタイプとしてのマルティヌス像を継受しただけとも想定できる。しかしマルティヌス像のなかでも、治癒奇蹟をおこなう者というイメージについては、はやくもアニアヌス没後半世紀に継受されている。したがって第1と第4のイメージの生成過程には、別の事情を考慮する必要があるだろう。一方、同じく「占い」によって選出されたとは

---

(46) 詩編 65.5, 一コリ 3.11, マタ 16.18。聖書訳は、共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳——旧約聖書続編つき』共同訳聖書実行委員会訳（日本聖書協会、1991年）にしたがう。

(47) VE1, p. 319, c. 15: 'Nunc scimus quia electio haec est a Deo; et ideo rogamus ut ipse sit pontifex quem Christus praedestinavit'.

(48) Sulpicius Severus, pp. 270-273, c. 9. ほかの例としては、Jonas of Orleans, p. 815, c. 24; トゥールのグレゴリウス『歴史十卷（フランク史）I』兼岩正夫、臺幸夫訳註（東海大学出版会、1975年）、282-283頁、4巻16。

いえ、両者の間にはそのプロセスに根本的な相違が存在する。マルティヌスの場合は、単独の候補者であり、「占い」は彼の適格性を証明するための手段であった。したがって、複数の候補者の名を書いたくじも、それを引かせる「無垢の幼児」も、彼の選出過程には登場しない。また「占い」に利用される聖書は詩編のみで、それを無作為に開いた箇所も異なる<sup>(49)</sup>。つまり両者には、テキスト上の系譜関係も存在しないのである。したがってアニアヌスに第 4 のイメージが付与されたのは、むしろ 9-10 世紀に固有の事情が存在したのであろう。

その可能性の 1 つとしては、カロリング朝のもとで推進された民衆教化政策の影響である。民衆の教化を推進する際、聖人崇敬の高揚はもっとも効果的な手段だと考えられていた。そのために聖人伝が書き直されたり、新たに執筆されることもあった<sup>(50)</sup>。アニアヌスに関する聖人伝群にも、このような役割が期待されていたとすると、第 4 のイメージは有効な武器になったと思われる。なぜなら「使徒の占い」は、エリートも民衆も含みこんだ、中世人の素朴な信仰心を反映した慣習だったからである。ときに「占い」は、異教時代の運命の女神の残滓を感じ取る教会人によって、断罪されることもあった。しかし聖職者が主宰するかぎり、「占い」は「神の摂理の表現」とみなされ、正当化されていた<sup>(51)</sup>。いずれにせよ、この

---

(49) ダビデの詩「あなたの威光をたたえます／幼子、乳飲み子の口によって。」で始まる部分（詩編 8.2-3）。アニアヌスの伝承のなかでは、唯一 VE2 で、この部分が引用されている。しかしそれは開いた聖書の箇所としてではない。幼児の口から次期司教の名が発せられたことを、聖人伝作者が聖書の文言でたとえたのである。

(50) 多田哲「9 世紀前半リエージュ司教区における民衆教化——リエージュ司教とサン・チュベール修道院の関係を通して——」『史学雑誌』第 105 編第 9 号（1996 年）、41-64 頁。

(51) J.-C. Poulin, 'Entre magie et religion: Recherches sur les utilisations marginales de l'écrit dans la culture populaire du haut moyen âge', in *La culture populaire au moyen âge: Études présentées au Quatrième colloque de l'Institut d'études médiévales de l'Université de Montréal, 2-3 avril, 1977*, ed. by P. Boglioni (Montreal, 1979), pp. 130-136; V. I. J. Flint, *The Rise of*

習慣は中世カトリックのもつ呪術性の典型例の1つとも言えるもので、中世人の心性に広く訴えかけたと考えられる。

### 第3章 9-10世紀の都市オルレアンと聖アニアヌス崇敬

第1章および第2章の考察の結果、アニアヌス崇敬の発展にとって、9-10世紀が重要な時期の1つであることがわかった。そこで本章では、この200年間に焦点をあて、アニアヌス崇敬発展の背後にあった諸事情を解明する。

カロリング期オルレアン司教区における聖人崇敬発展のプロセスについて、ヘッドは次のように述べている。「そのプロセスは、これらの聖人に捧げられた宗教共同体の創設と発展、およびおそらくその共同体のメンバーによる、それら聖人に関する聖人伝作品を通じて、生じた」<sup>(52)</sup>。ある共同体が、その守護聖人に対する崇敬を高めようとするのは、当然のことである。しかしその一方で、第1章での検討結果は、そのような単純な論理だけでは、崇敬発展のメカニズム解明には不十分であることを物語っている。筆者がかつてリエージュ司教区の場合で明らかにしたように、聖人崇敬の高揚には、その聖人をいただく共同体以外の諸勢力が、さまざまな形で関係していたはずなのである<sup>(53)</sup>。アニアヌス崇敬の場合、これら諸勢力として想定しうるのは、カロリング王権、カペー王権（ロベール家）、オルレアン伯、オルレアン司教座教会などである。本稿ではサン＝テニャン教会のほかに、このなかでもオルレアン司教座教会を中心に考察をおこなう。なぜなら第1章でみたように、司教は本稿の対象とする期間中、継続的に

---

*Magic in Early Medieval Europe* (Princeton, 1991; repr. 1994), pp. 273-286; R. MacMullen, *Christianity and Paganism in the Fourth to Eighth Centuries* (New Haven, 1997), p. 139; ジャン＝クロード・シュミット『中世の迷信』松村剛訳（白水社、1998年）、116-121頁。

(52) Head, p. 33.

(53) 註(50)であげた拙稿参照。

アニアヌス崇敬にかかわっていたからである。

### 第1節 司教座教会の権威に従属させられるアニアヌス崇敬

第1章で述べたように、アニアヌス崇敬は、歴代司教テオドルフス、アギウス、ワルテリウスからの保護・振興の対象となっていた。また、アニアヌスの司教選出にまつわる伝承は、司教座教会側から発したものであった。というのも、この伝承は *VE1* で初めて語られ、ルキフェルス作 *VE2* に受け継がれた。第1章で述べたように、これら聖人伝群を執筆したのは司教座教会の参事会員だった。これらの事実は、アニアヌス崇敬が司教座教会からの全面的支援を受けていたことを意味しているのであろうか。

ここで留意すべきは、司教座教会側の聖人伝群の主人公はアニアヌスではなく、あくまでエウルティウスだということである。エウルティウスは司教座教会の権威を体現する聖人であった<sup>(54)</sup>。その観点から、*VE1* および *VE2* における、アニアヌスの位置を再考する必要がある。

司教座教会に発する聖人伝群のなかで、次の箇所が双方の関係を示唆する。オルレアン司教エウルティウスは、死期が迫っていることを悟り、述べた。「私はあなたがたに告げる。私の死後は、兄弟であり同僚司祭であり修道院長であるところのアニアヌス（彼の人生を、多くの経験からあなたがたは知っている）を、あなたがたの手で、ここに速やかに、あなたがたが司教に叙任するように」<sup>(55)</sup>。その後、都市内の党派闘争のため、司教選出はいったん紛糾したが、調停されたことは第2章でも述べたとおりである。その調停をおこなったのも、現司教エウルティウスであった。「使徒の占い」によるアニアヌス選出の報告を受け、「そして聖エウルティウスは、大きな喜びに満たされて、すべての人々にさようならを言った。至福なるアニアヌスに聖職者と民衆を託し、彼に教会を託した。そして、ど

---

(54) 註24であげた拙稿参照。

(55) *VE2*, p. 57, c. 17: 'suadeo vobis, ut post transitum meum fratrem et compresbyterum abbatemque Anianum, (cuius vitam experimentis plurimis cognovistis) vobis episcoporum ordinetis ita citus'.

のようにしてこの教会を統治し、統べるべきなのかを、彼に教えた」<sup>(56)</sup>。その後エウルティウスは、至福のなかで生涯を終えたのである。つまりエウルティウスは、アニアヌスの司教選出に力を発揮し、その後見役も勤めた人物ということになる。彼は霊的系譜の上で、アニアヌスの上位に位置づけられていたのである。ところで、オルレアン司教のリストで現存する最古のものは、11世紀末以降に編集され、アンジェのサン＝トーバン修道院に伝来していたものである。このリストも、アニアヌスがエウルティウスの後継司教である点を証言している<sup>(57)</sup>。

しかしながら現代の目からみると、この部分が明白な虚構であることは、明らかである。エウルティウスはヴァランス教会会議(374年)の署名にあらわれる一方、アニアヌスはフン族のオルレアン包囲(451年)時の司教である。したがって両者が同時代人とは考えがたい<sup>(58)</sup>。ではルキフェルスたちは、どのように考えていたのであろうか。それを解く鍵は、メロヴィング期のVA1のある一節にある。司教エウルティウスが没し、「長い時期が過ぎ、多くの司教が亡くなった後で」、アニアヌスが司教職を引き受けた<sup>(59)</sup>。したがって少なくとも、この聖人伝が執筆された5世紀末から6世紀初頭には、両者は別の時代の人物で、かつ、その間には複数の司教が在位したと考えられていた。それ以降に両者が同時代人であるという伝承が何らかの形で成立し、ルキフェルスたちはそれに従っただけという

(56) VE1, p. 319, c. 15: 'Deinde sanctus Evurtius, magno gaudio repletus, valedicens cunctis et commendans beato Aniano clerum et populum, consignavit ei ecclesiam et instruxit eum qualiter ipsam ecclesiam gubernare et regere deberet.'

(57) L・デュシェーヌにより校訂されている。L. Duchesne, *Fastes épiscopaux de l'ancienne Gaule*, II (Paris, 1899), pp. 433-460.

(58) C. Cuissard, 'Les premiers évêques d'Orléans: Examen des difficultés que présentent leurs actes', *MSAHO*, 21 (1886), 1-282; J.-M. Berland, 'Les origines de l'Eglise d'Orléans (IV<sup>e</sup>-VII<sup>e</sup> siècles)', *BSAHO*, n.s. 49 (1978), 31; G. Renaud, 'Saint Aignan et sa légende, les "vies" et les "miracles"', *BSAHO*, n.s. 49 (1978), 83-109, esp. 84-85; Debal, *Cenabum*, p. 120 参照。

(59) VA1, p. 108, c. 2: 'post multo tempore, multisque episcopis decedentibus'.

仮定も成り立つだろう。しかしカロリング期においても、両聖人が別の時代の人物であると認識が存在していたと思われる。なぜなら10世紀に作成された複数のVA1写本においてもなお、前述の文言がそのまま引き継がれているからである<sup>(60)</sup>。

オルレアン史の大家J・ドゥバルは、ルキフェルスたちは、両者の霊的親子関係を示そうとするあまり、メロヴィング期の聖人伝の文言を「忘れた」のだと考える<sup>(61)</sup>。しかし彼らの試みは、実際にはより積極的なものであったろう。前述のように、エウルティウスは司教座教会の権威を体現する聖人である。つまりルキフェルスたちの虚構の捏造により、アニアヌスの権威は司教座教会のそれに従属させられたのである。

聖人伝の内容をみるかぎり、アニアヌス崇敬は司教座教会から、全面的支援を受けてはいなかった。その事情を解明するためには、聖人伝から離れて、都市における聖人崇敬のあり方に立ち入らなければならない。

古代ローマ都市では、死者は市壁の外の郊外に葬られた。キリスト教の殉教者なども、ここに眠ることになる。信徒は殉教者の命日に墓前に集まり、彼らを追憶した。そして自身も殉教者の傍らで永眠することを望む。やがてこれらの墓所が、キリスト教徒の礼拝の中心地となる。青山吉信氏は「この意味で、キリスト教信仰は、具体的には、都市近郊の墓地に生じた」とさえ述べている<sup>(62)</sup>。殉教者たちが聖人として崇敬を集めるようになると、ガリア、スペイン、イタリアでは4世紀末以降、墓の上あるいは脇に廟が建てられるようになる。その廟が聖堂に発展し、さらに巡礼を集めたのである。ローマのサン＝ピエトロ聖堂は、その典型的な例である。

---

(60) Paris, BN, lat. 11748, fol. 70<sup>v</sup>-70<sup>v</sup>; Munich, BSB, clm 18546, fol. 91<sup>r</sup>. ルノーはむしろ VE1 や VE2 の記述がもとになって、サン＝トーバン伝来の司教リストの編集者に影響を与えたのだと主張している。Renaud, 'Saint Aignan et sa légende', 83-84.

(61) Debal, *Cenabum*, p. 120. ドゥバルによれば、VA1 の古写本 22 点のうち、12 点がこの一節を含んでいる。

(62) 青山吉信『聖遺物の世界——中世ヨーロッパの心象風景——』（山川出版社、1999 年）、12 頁。

ガリアでも、トゥールのサン＝マルタン修道院など、多くの例が見られる。

それに対して、市壁内に位置した司教座聖堂はどのような立場にあったのか。司教座は必ずしも、郊外の墓廟の管轄権を保有しているわけではなかった。さらに、司教座聖堂自体の求心力も高くなく、それら郊外の墓廟に人気を奪われる形となっていた。その最大の原因は、多くの司教座聖堂が、普遍的な聖人に捧げられていたことである。たとえば、郊外に聖ゲルマヌス（オセール司教）の墓廟をもつオセールでは、司教座聖堂は筆頭殉教者聖ステファヌスに捧げられていた。郊外にディオニシウスの墓廟をもつパリでは、司教座聖堂はステファヌスに、次いで聖母に捧げられていた。アルプス以北の人々にとっては、キリスト、聖母、十二使徒、ローマ期の殉教者などは尊敬の対象ではあったものの、遠い存在であった。もちろん、異郷の地で没した聖人の遺物を保持することもまだ珍しかった<sup>(63)</sup>。それに対して、郊外の墓廟に現に眠っている地方的聖人は、彼らの卑近な願いをかなえてくれる、身近な存在であった。異教時代のガリアでは、人々は豊饒、健康などの現世的な利益を、自然物に宿る神や聖霊に願っていた。その意味で、地方的聖人は異教の神々の、その聖遺物は泉や樹木など自然物の、キリスト教時代における後継者なのである<sup>(64)</sup>。

(63) ローマでも同様の関係が見られる。コンスタンティヌス帝がローマ司教座聖堂として建設したラテラノ聖堂は、盛期中世まで聖遺物を保持せず、サン＝ピエトロ聖堂の人気に圧倒されていた。ステファヌスに捧げられていた司教座聖堂については、Berland, 'Les origines', 35 参照。普遍的聖人の聖遺物が本格的にアルプス以北に流入するのは、カロリング期以降である。註96および97で挙げる文献を参照。

(64) J. Hubert, 'Evolution de la topographie et de l'aspect des villes de la Gaule du IV<sup>e</sup> au X<sup>e</sup> siècle', *Settimane [di Studio del Centro italiano di studi sull'alto medioevo]*, 6 (1959), 541-548; P.-A. Février, 'Permanence et héritages de l'antiquité dans la topographie des villes de l'Occident durant le haut moyen âge', *Settimane*, 21 (1974), 117-128; P. Brown, *The Cult of the Saints: Its Rise and Function in Latin Christianity* (Chicago, 1981; repr. 1982), pp. 3-9 and 42; Head, p. 292; J.-C. Picard, 'Auxerre', in *Topographie*, VIII, pp. 47-65; N. Duval, P. Perin, and J.-C. Picard, 'Paris', in *Topographie*, VIII, pp. 97-129;

現在のオルレアンでは、威容を誇る司教座聖堂が、中心街の一部を形成している。オルレアン市外からでも、全高 114 メートルの尖塔を確認することができる。それに対して、全長比で 2 分の 1 以下のサン＝テニャン聖堂は、町外れにひっそりとたたずんでいるかのようである。この現状は、かつての両者の力関係を想像しにくくしている。しかしオルレアンの場合も、前述の事情が当てはまる。そればかりか、ほかの司教座よりも不利な境遇に置かれていた。第 1 章でも述べたように、アニアヌスの聖遺物をいただくサン＝テニャン聖堂は、史料上その創建を 6 世紀、おそらく実際には 5 世紀にまでさかのぼる古刹である。一方で、司教座聖堂は普遍的聖人に捧げられ、しかもその発展には断裂があった。4 世紀後半－5 世紀に創建された最初の司教座聖堂は、ステファヌスに捧げられていたらしい（サン＝テティエンヌ聖堂）。しかしこの聖堂は、早々と競争に敗れたらしく、司教座聖堂として中心的機能を発揮することに失敗した。市壁内北東部の一角に、聖十字架に捧げられた聖堂（サント＝クロワ聖堂）が建設されると、司教座の機能はこちらに移動した。

しかし当のサント＝クロワ新司教座聖堂の存在は、史料的には 814 年に初めて言及され、推定上も 7-8 世紀までさかのぼることができるに過ぎない。聖十字架の聖遺物をいつ取得したかについては、研究者のあいだで意見がわかれている<sup>(65)</sup>。前述のように司教座教会は、みずからの権威づけ

---

B. Abou-El-Haj, *The Medieval Cult of Saints: Formations and Transformations* (Cambridge, 1994; repr. 1997), pp. 7-11; 佐藤彰一『修道院と農民——会計文書から見た中世形成期ロワール地方——』（名古屋大学出版会、1997 年）、35-55 頁、パトリック・ギアリ『死者と生きる中世——ヨーロッパ封建社会における死生観の変遷——』杉崎泰一郎訳（白水社、1999 年）、168-169 頁、青山『聖遺物の世界』、6-28 頁。

(65) ルイ 1 世がオルレアン教会に発給したインミュニテ確認文書が、史料初出。*Cartulaire de Sainte-Croix d'Orléans (814-1300)*, ed. by J. Thillier and E. Jarry (Orléans, 1906), p. 67, c. XXXIV: 'ecclesiam Sanctæ Crucis'. 司教座聖堂の創建と発展については、Berland, 'Les origines', 32-43; *Histoire d'Orléans et de son terroir*, I, pp. 173-178; Gaillard and Debal, pp. 12, 22, and 26; Picard, 'Orleans'; pp. 88-91; Debal, *Cenabum*, pp. 124-128 を参照。



に地方的聖人エウルティウスを持ちだした。そのことを考えると、聖十字架が市民の人気を勝ち得るためには、まだ時期を要したのであろう。また当時は市壁で隔てられていたとはいえ、サン＝テニャン聖堂は、サント＝クロワ司教座聖堂から直線距離にして 500 メートルも離れていない。これはパリ司教座聖堂とサン＝ドゥニ修道院との関係とは決定的に異なるし、トゥール司教座聖堂／サン＝マルタン修道院間の距離よりもかなり短い。また当時のオルレアンは複数の教区に分割されていなかったようで、司教座聖堂とサン＝テニャン聖堂は、おなじ教区に並存していたことになる<sup>(66)</sup>。したがって聖アニアヌス崇敬の高揚は、即座に司教座聖堂の人気に響いてくるのである。（地図参照）

9-10 世紀のオルレアン市民にとって、司教座聖堂は新参者であった。そこに参詣しても、願いをこめる聖遺物は見当たらなかった。あるいは見つけたとしても、それは天上の存在であるキリストの代替物であり、市民が期待を寄せる自分たちの聖人ではなかった。自分たちの聖人の遺物であれば、ものの 10 分も歩けば、そこで拝めたのである。

司教座教会が、このような状況を歓迎していたはずはない。なぜならカロリング期の教会改革は、司教座中心の霊的秩序形成を目指していたからである。筆者はかつて民衆教化を扱った論文で、次のことを強調した。カロリング朝は、説教、キリスト教的教育、信徒の宗教生活の監督などを、恒常的におこなう組織の確立を目指した。それは修道院や伝道団ではなく、在俗教会の整備によった。教会ヒエラルキーの頂点にある司教はその全責任を負い、ほかの勢力の干渉を排しつつ、自己を中心とする霊的秩序形成を目指した<sup>(67)</sup>。この秩序は、組織面で形成されたのみならず、地誌的な面でもそうであった。司教テオドルフスは、オルレアン司教区で以下の

(66) サン＝テニャン教会は 1802 年まで、教区として独立していない。Gaillard and Debal, p. 19.

(67) 多田哲「リエージュ司教と民衆教化——『ゲルバルドゥス蒐集』(806 年)にみられる司教の施策——」『西洋史研究』新輯第 26 号 (1997 年), 144-158 頁。そのほかに註(50), (80)で挙げる拙稿を参照。

ような命令を出している。「都市周辺および都市の司祭と民衆は、われわれが命じたように、公開ミサを祝うために、1ヶ所に集まれ。公共の場に現れず、修道院禁域内にとどまる習慣になっている、神に捧げられた女性を除いては」<sup>(68)</sup>。司教区第1の「都市」オルレアンで、「1ヶ所」とはサント＝クロワ司教座聖堂以外には考えられない。

司教座聖堂がほかの聖堂に人気を奪われることは、精神面だけではなく、実際面でも問題があった。アニアヌス崇敬の高揚は、市民や巡礼者を引きつけ、喜捨の増加を誘発する。それは逆に、近接する司教座聖堂への喜捨の減少を招いたであろう。またテオドゥルフスは、イエスが神殿の境内から商売人を追い出した故事にならい、諸聖堂での商取引を禁じている<sup>(69)</sup>。R・マッキタリクによれば、この規定は、当時のオルレアン司教区で、公共の市場が開設されていた複数の聖堂の存在を示唆している。後にサン＝テニャン・ブールと呼ばれるオルレアン東部は、新しい市街地を発展させつつあった。したがって、この区域の地誌的中心として、サン＝テニャン聖堂で市が開かれていたことは、想像に難くない。聖人の祝日に市が開かれていたなら、アニアヌスの人気は市場のにぎわいを誘発したであろう<sup>(70)</sup>。他方、司教座教会は概して占来より市場権を有し、そこからの収益に関心を寄せていた。ペパン（短軀王）3世は宮宰時代の744年に、次のような命令を発布している。「各司教はキヴィタス中で、適正な市場価

(68) Theodulf of Orleans, p. 142, c. XLV: 'Sed sive sacerdotes, qui in circuitu urbis aut in eadem urbe sunt, sive populus, ut praediximus, in unum ad publicam missarum celebrationem convenient exceptis deo sacratis feminis, quibus mos est ad publicum non egredi, sed claustris monasterii contineri.'

(69) マタ 21.12-13; Theodulf of Orléans, pp. 108-109, c. VIII.

(70) R. McKitterick, *The Frankish Church and the Carolingian Reforms, 789-895* (London, 1977), pp. 55-56; J. Debal, *Le plan d'Orléans à travers les siècles* (Orléans, 1980), p. 13; ジョルジュ・デスピィ「9-10世紀の都市と農村——ムーズ地域の場合——」平嶋照子、森本芳樹訳、森本芳樹編『西欧中世における都市と農村』（九州大学出版会、1987年）、96-90頁、山田雅彦「フランドル年市初期史の再構成に向けて——研究史とヘントの事例研究——」『市場史研究』6（1989年）、1-20頁。

格を維持しなければならない」<sup>(71)</sup>。つまり司教は、都市内市場の管理責任者であった。オルレアンでは、ルイ1世が同地における流通税収入の半分を、司教座教会の取り分として認めている（814年、テオドゥルフス期）。流通税収入の譲渡が問題となるとき、それは交易の存在を前提としていたという考えに基づけば、当時のオルレアン司教も市場権を保持していた<sup>(72)</sup>。したがって司教座教会にとって、ほかの勢力の影響下にある市場の存在は、一種の権利侵害とみなしうる。テオドゥルフスは、教會的倫理に名を借りて、サン＝テニャン教会の隆盛を苦々しく思っていたのかもしれない。表面化することはないにしても、司教座教会とサン＝テニャン教会の間には、水面下でデリケートな確執が存在したに違いない。

## 第2節 サン＝テニャン教会の独立性

両者の「デリケートな確執」を、直接的に証拠立てることは困難である。しかし、確執を生むような条件が存在したことは間違いない。シャルル2世は、司教座教会に対して発給した権利証書（840-843年）で、次のよう

---

(71) *Capitulare Suessionense*, ed. by A. Boretius, in *MGH Cap*, I, p. 30, c. 6: 'unusquisque episcopus [...] per omnes civitatis legitimus forus [legitimos foros] [...] faciat'. A・エルランド＝ブランデンブルは、この条項を誤って「司教は各都市で、市場を開設しなければならない」と解釈した。この解釈に発して彼は、それが司教の市場開設独占権を示唆すると考えた。正しい解釈に基づけば、彼の主張は支持できない。しかし、彼の指摘どおり「多くの市場が実際に最近まで、司教座聖堂の近くで開かれていた」のも事実である。A. Erlande-Brandenburg, *La cathédrale* ([Paris], 1989), p. 91. 「forum」の解釈については、*Mediae latinitatis lexicon minus*, ed. by J. F. Niermeyer (Leiden, 1976; repr. 1997) 参照。オルレアンでは「civitas」を市壁内部の旧市、「urbs」を市壁外の新市も含んだ都市全体を意味しているようである。註(11), (15), (42), (45), (68)および(74)参照。この「キヴィタス」が、市壁内の旧市を意味するとすれば、市壁外の市場との競合が予想される。

(72) *MGH Formulae Merovingici et Karolini aevi*, ed. by K. Zeumer, p. 300, no. 19; 山田雅彦「市と交易」江川温、服部良久編著『西欧中世史（中）——成長と飽和』（ミネルヴァ書房、1995年）、151-160頁。

に述べた。

〔司教ヨナスは〕われわれに以下のことを望んだ。われわれの祖父〔シャルルマーニュ〕と父〔ルイ1世〕が、この〔オルレアン司教座〕教会に返還した庵や資産、さらにこの返還前から教会が法的に正当に保持、保有していたそれらのものについて、われわれが権威ある命令をなすよう、決めて欲しい。それによってより確かにより安全に、前述の資産を現在も未来も、同教会が保持、保有し、そして保護できるように<sup>(73)</sup>。

シャルル2世はこの願いを聞き入れた。そして司教座教会が保有する「庵」を列挙した。そのなかでオルレアン市内に所在を確認できるのは、

サン＝トゥヴェルト、サン＝タヴィ、サン＝メマン、サン＝ジャン、サン＝マルソー、このキヴィタスの市壁付近のサン＝マルタン、サン＝ローラン、サン＝ジェルヴェ〔後のサン＝ファリエ〕、サン＝ヴァンサン、サン＝セルジュ、サン＝ピエール＝オ＝ゾム〔後のサン＝ピエール＝アン＝ポン〕、サン＝ピエール＝ル＝ピュリエの庵<sup>(74)</sup>

である。このリストは、当時の存在が確認されている市内の聖堂をほとんど含んでいる（地図参照）。サン＝テニャンと同じく墓廟として名高い、

(73) *Recueil des actes de Charles II le Chauve, roi de France*, 1: 840-860, ed. by G. Tessier (Paris, 1943), p. 64, no.25: 'Postulavit itaque nobis ut de eisdem cellis et rebus, sive quas [...] avus noster sive genitor noster eidem reddiderunt ecclesiae, necnon et de his quas ante ipsam redditionem jure et legaliter [...] tenebat et possidebat ecclesia, nostrae auctoritatis praeceptum [...] fieri decerneremus, per quod firmiter et securius praedictas res modernis futurisque temporibus ipsa teneat et possideat atque defendat ecclesia'.

(74) *Recueil*, p. 64, no.25: 'cellam sancti Evurcii, sancti Aviti, sancti Maximini, [...] sancti Johannis, sancti Marcelli, [...] item sancti Martini quae est prope murum ipsius civitatis, sancti Laurentii, sancti Gervasii, [...] sancti Vincentii, sancti Sergii, sancti Petri virorum, sancti Petri puellarum'. 本稿で「庵」と訳出している 'cella' は、当時の用法では「小聖堂」を意味する。Picard, 'Orléans', pp. 93-94.

サン＝トゥヴェルトやサン＝タヴィ (聖アウィトゥス) も、リストアップされている<sup>(75)</sup>。にもかかわらず、サン＝テニャン聖堂は言及されていない。アニアヌスの聖遺物は、司教座教会の管轄から外れていたのである。この状態は、紀元千年まで変化しない。シャルル2世以降、教皇レオ7世 (938年, 司教アンセルムス宛文書), ロテール王 (956年, 司教エルメンテウス宛文書), 教皇ベネディクトゥス7世 (974-980年, 司教アルヌルフス宛文書), ルイ5世 (979年, 司教アルヌルフス宛文書), ユーグ・カペー (990年, 司教アルヌルフス宛文書), ロベール2世 (991年, 司教宛アルヌルフス文書) たちは徹底して、司教座教会にサン＝テニャン聖堂の保有を許していない。その一方で、ペパン3世は同教会にインミュニテを与え、後継王権はその確認を続けている<sup>(76)</sup>。

それと矛盾するかのように、オルレアン司教がサン＝テニャン院長職、あるいはそれに相当する立場を兼ねる場合があったことも事実である<sup>(77)</sup>。しかし司教職と院長職は、無条件に結合していたわけではない。テオドルフス (位 798 以前－818 年) は、シャルルマーニュから院長職に任命さ

(75) M. Vieillard-Troiekouff, 'Les monuments religieux de la Gaule d'après les œuvres de Grégoire de Tours' (unpublished doctoral dissertation, University of Paris IV, 1974), p. 200.

(76) *Cartulaire*, pp. 37-45, 78-86, 125-129, and 519-521, cc. XIX, XX, XXXIX, XL, LXIV, and CCCLXXVI; J. F. Böhmer, *Regesta imperii*, I: *Die Regesten des Kaiserreichs unter den Karolingern 751-918*, ed. by E. Mühlbacher, 2nd edn (Innsbruck, 1908; repr. Hildesheim, 1966), pp. 245-246. 王権によるインミュニテ付与は、クローヴィス2世妃バルティルドによるものまでさかのぼる (653/654年ころ)。しかしカロリング期のそれとの間に持続性をみることにについては、慎重に検討すべきであろう。なおバルティルドはインミュニテ付与と同時に、サン＝テニャン教会に混合戒律を導入させたと考えられている。Vita sanctae Balthildis, ed. by B. Krusch, in *MGH SRM*, II, pp. 493-494, c. 9.

(77) サン＝テニャンの共同体は、聖堂参事会戒律の導入以前は「修道院」、以降は「教会」となった。ただし戒律の導入にともなって、内部組織の大幅な改革がおこなわれた形跡はない。そこで本稿では、この組織のリーダーをいずれの場合も「院長」と呼ぶことにする。註(22)および(76)参照。

れた<sup>(78)</sup>。しかしルイ1世によってアンジェに追放されると(817年)、院長職を剥奪された。後継者ヨナス(位818-843年)は、司教登位時には院長職は継承していない。このことは、院長職は司教職と結合していたわけではなく、テオドゥルフス個人に帰していたことを意味するのでないか。ヨナスが院長職を務めるのは、その後15年以上先のことである。

この間オルレアン伯ウッドが、サン＝テニャンに対する支配権を確立していた(830年)。ヨナスはウッドの死後、834年に伯権力を掌握したため、それに付随するサン＝テニャン院長職を継承した。後継司教アギウス(位843-867?年)は、サン＝テニャン院長職を含め、ヨナスの全権能を継承した。このうち伯権力については、861年からロベール家のロベール・ル・フォールが掌握する。次の司教ワルテリウス(位867-891年)は、院長職を手放したようである。ロベールの後継伯ユーク・ラベ(「院長」)は876年以降、サン＝テニャン院長職を兼任した。ユークの後、伯職はロベール家で継承され、オルレアン伯とサン＝テニャン院長職が分割されることはない<sup>(79)</sup>。つまりサン＝テニャンの院長職は、伯ウッドから紀元千年のロベール2世に至るまで、オルレアン伯、あるいは伯を兼ねる公や王の手にあったと言える。ヨナス以降の何人かのオルレアン司教は、確かにサン＝テニャン院長職を兼職した。しかしそれは彼らが司教座教会の長であった

---

(78) シャルル・マルテルは733年にオルレアン司教エウケリウスを追放して、オルレアン「司教国家」を解体した。それ以来テオドゥルフス就任まで、サン＝テニャン修道院はカロリング家の直接管轄下にあった。J. Semmler, 'Episcopi potestas und karolingische Klosterpolitik', in *Mönchtum, Episkopat und Adel zur Gründungszeit des Klosters Reichenau*, ed. by A. Borst (Sigmaringen, 1974), pp. 346-348; R. Kaiser, *Bischofsherrschaft zwischen Königtum und Fürstenmacht: Studien zur bischöflichen Stadtherrschaft im westfränkisch-französischen Reich im frühen und hohen Mittelalter* (Bonn, 1981), p. 496.

(79) Kaiser, *Bischofsherrschaft*, pp. 496-498; F. Muller, 'Les formes du pouvoir en Orléonais (814-923)', *BSAHO*, n.s. 78 (1987), 12-13 and 19-21; Head, pp. 31 and 145; J. Heuclin, *Hommes de Dieu et fonctionnaires du roi en Gaule du Nord du V<sup>e</sup> siècle au IX<sup>e</sup> siècle* (Villeneuve-d'Ascq, 1998), p. 332.

からではなく、むしろ彼らの伯職に由来するものであった。

サン＝テニャン教会の独立性について、次のような結論が得られる。同教会は組織の点で、司教座教会から事実上分離していた。その立場は、歴代の教皇、皇帝、王から、明示的あるいは非明示的に保証されていた。したがってオルレアン司教座教会は、アニアヌスの聖遺物に対して、なんらの権利も有しない。アニアヌス崇敬の当事者でもなければ、直接恩恵を受ける立場にもない。自己の勢力範囲に、いわば宗教的な飛び地を抱えていたわけである。聖人伝でみられたようなアニアヌス崇敬に対する態度は、このような状況下ではむしろ当然であった。

### 第3節 オルレアン司教座教会からの支援

オルレアン司教座教会は、アニアヌス崇敬をみずからの権威に従属させようとしていた。しかしその一方で、第1章で述べたように、崇敬の発展にとって司教の寄与があったことも事実である。すなわち、一見相反するように思われる動向が、並立していたのである。その矛盾を解き明かすことが、本節の課題である。アニアヌス崇敬は、なぜ司教からの支援を得ることができたのか。

第1に考慮すべき事情は、当時の両者の間には、信仰拠点としての競争力に圧倒的な差が存在した可能性である。そうなるとアニアヌス崇敬の抑制は不可能であり、強引な抑制はかえって、信徒たちからの反感を買うおそれもあったろう。そのような状況下で司教座教会は、アニアヌス崇敬を自分たちのエウルティウス崇敬に取り込むことを選んだと言える。なぜなら前述のように、司教座教会はエウルティウスを霊的系譜の上で、アニアヌスの上位に位置づけた。この観念が定着すれば、アニアヌス崇敬の高揚は、エウルティウスの権威を逆に強化することになるからである。

第2に検討すべき事情は、カロリング期における司教の役割の多重性である。前述のように司教は司教座教会のリーダーであったが、彼らの役割はそれにとどまらない。司教は国政の一翼を担う一方で、司教区の統率者であった。それと同時に、彼らは司教座都市の聖俗両面の責任者であった。メロヴィング末期の多くの司教は、軍事力を含む世俗権力を兼併し、司教

座都市で「司教国家」を形成した。その存在はカロリング家の統一事業の妨げであり、シャルル・マルテル以降、聖俗権力の分離がおこなわれたと言われている<sup>(80)</sup>。しかしながらカロリング期の司教も、都市内で一定の世俗的権力を保持していた。司教は都市の行政を担当し、糧食の供給義務を負った。経済面でも市場を管理し、度量衡を統一しなければならなかった。カロリング末期になると、再び都市の防衛も担当することになった。オルレアンでも、ヨナス以降の司教が伯権力を行使したことは、第2節でも述べた。実際、アギウスはノルマン人の侵攻に際して、シャルトル司教ブルカルドゥスとともに船団を率いて、オルレアンの防衛に努めている。またワルテリウスは、市壁の修復をおこなっている<sup>(81)</sup>。

これらの役割のうち、どれに重点を置くかについては、司教ごと、さらにはそのときどきの状況によって一定ではなかった。たとえばリエージュ司教は、アーヘンとの近接性から、国政に参画する立場にあった。その管区内においては、司教座教会の権威を司教区中に行き渡らせればよく、そ

---

(80) 註(78)で挙げた文献のほかに、F. Prinz, *Klerus und Krieg im frühen Mittelalter: Untersuchungen zur Rolle der Kirche beim Aufbau der Königsherrschaft* (Stuttgart, 1971); F. Prinz, 'Der fränkische Episkopat zwischen merowinger und karolingerzeit', *Settimane*, 27 (1981), 101-146; *Karl Martell in seiner Zeit*, ed. by J. Jarnut, U. Nonn, and M. Richter (Sigmaringen, 1994); 多田哲「カロリング王権と民衆教化——『一般訓令』(789年)の成立事情を手掛かりに——」『西洋史学』第178号(1995年), 45-58頁とくに48-49頁参照。

(81) *Admonitio generalis*, ed. by A. Boretius, in *MGH Cap*, 1, p. 60, c. 74; Prudentius of Troyes, [*Annales Bertiniani, pars secunda*], ed. by F. Grat, J. Vielliard, and S. Clémencet, in *Annales de Saint-Bertin*, p. 69, a.854; Prinz, *Klerus*, pp. 105-107; Debal, *Le plan*, p. 14; Muller, 18-21; Erlande-Brandenburg, p. 91; R. Kaiser, 'Les évêques neustriens du X<sup>e</sup> siècle dans l'exercice de leur pouvoir temporel d'après l'historiographie médiévale', in *Pays de Loire et Aquitaine de Robert le Fort aux premiers Capétiens: Actes du colloque scientifique international tenu à Angers en septembre 1987*, ed. by O. Guillot and R. Favreau (Poitiers, 1997), pp. 117-121.



の意味では政策は単純であった<sup>(82)</sup>。一方、オルレアン司教も、国政への参画という点では、リエージュ司教に劣らない役割を担っていた。フランクの東西分裂後は、とりわけそうであった。しかし管区内においては、リエージュ司教とはまったく異なる環境に置かれていた。つまり司教座都市の成熟度の相違である。「リエージュのヴィクスが形成されうるのは、最も早くても8世紀中葉になる」<sup>(83)</sup>。一方、オルレアンは前述のように、ケルト時代以来、ガリアの中心都市の一つであった。したがって歴代のオルレアン司教には、都市の責任者として果たすべき役割が、相対的に高かったと考えられる。アニアヌス崇敬が、司教からの支援を取り付けられたのは、このことと関係している。

オルレアン司教区は、都市オルレアンの外にも高名な宗教施設を抱えていた。ガティネ地方には、「カロリング・ルネサンス」の中心地の1つ、フェリエール修道院があった。そしてロワール川に沿って、墓廟が分布していた。オルレアン以西では、ヨナス期以降にマクシムスの聖遺物を獲得するミシー修道院、聖リファルドゥスを奉ずるムン＝シュル＝ロワール修道院があった。オルレアン以东では、フルーリ修道院が、7世紀後半のいずれかの時点で、ベネディクトゥスの聖遺物を獲得し、名声を博していた。オルレアンはその一方で、ミシーやフルーリの進出を許していた。いずれの修道院も滞在や避難用に、守護聖人に捧げられた小聖堂をオルレアン市内に所持していた<sup>(84)</sup>。このような有力修道院に対して、都市オルレ

(82) 多田哲「カロリング王権による民衆教化政策の展開——カール大帝とリエージュ司教ゲルバルドゥスの関係を中心に——」『歴史学研究』第688号（1996年），17-31頁。そのほかに，註(50)および(67)で挙げた拙稿を参照。

(83) デスピ「9-10世紀の都市と農村」，77頁。

(84) C. de La Saussaye, *Annales Ecclesiae Aurelianensis saeculis et libris sexdecim* (Paris, 1615), pp. 276-277; J.-M. Berland, 'La présence bénédictine dans le diocèse d'Orléans, VII<sup>e</sup>-XIII<sup>e</sup> siècles: Moines noirs et moines blancs', *Bulletin de la Société Historique, Archéologique et Artistique du Giennois*, 29 (1981), 3-56; Head, pp. 22-23 and 236-237; Debal, *Cenabum*, pp. 132-133. フルーリ修道院は歴代国王の保護を受ける国王修道院であり，司教権力からの免属を獲得していた。

アンは司教区の首座として、聖性そのほかの点で競争力を維持する必要がある。司教は都市の責任者として、都市内ではライバル関係にあるアニアヌス崇敬を、都市第 1 の聖人崇敬として支援せざるを得なかったのである。

また第 1 章で述べたように、司教ワルテリウスは聖人の祝日を遵守させる命令を出している。これらのなかには「聖エウルティウスの命日、聖アニアヌスの命日、同様に聖ベネディクトゥス、聖マクシミヌス、聖リファルドゥスの命日、救済をもたらす聖十字架発見と、同じく生命を与える聖十字架称賛の祝日」が含まれていた<sup>(85)</sup>。この規定は、司教が場合によっては、司教区全体の利益を、すべての責任に優先しなければならなかったことを示唆する。後述するように、同規定は司教区の非常事態下で発布された。そのような状況下でも、アニアヌス崇敬は、司教による振興の対象となったのである。

#### 第 4 節 サン＝テニャン教会の脆弱性

このような司教の動きに対して、サン＝テニャン教会側はどのような態度をとったのか。この点を明らかにするためには、サン＝テニャン側に発する聖人伝群を分析する必要がある。ルノーによれば、サン＝テニャン側の VA2 は、司教座教会側の伝承、とくに VE2 から表現上の借用をおこなっている<sup>(86)</sup>。しかし司教座教会側聖人伝群への依存は、表現だけではなく、内容面にも現れている。確かに 9-10 世紀のサン＝テニャン側の聖人伝群は、その多くエピソードを、メロヴィング期の VA1 から受け継いでいる。しかし司教選出のエピソードについては、司教座教会側の伝承を継承しているのである<sup>(87)</sup>。第 2 章で述べたように、このエピソードはアニアヌスの選出に神聖な要素を付加するものであり、崇敬に新しい地平を開

(85) Walter of Orléans, p. 192, c. XVIII: '[festivitates] beati Evurtii de transitu, beati Aniani de transitu, beati Benedicti, beati Maximini, beati Lifardi similiter de transitu, de inventione salutifere crucis, de exaltacione eiudem vivifice crucis'. 註(26)参照。

(86) Renaud, 'Les miracles', 252.

(87) 註(41)参照。

いた。サン＝テニャン教会は、新しいイメージを自分たちで形成することはできなかった。司教座教会側の聖人伝作者の手に依存していたのである。

もっとも司教選出のエピソードが、司教座教会より前に、サン＝テニャンの共同体内で伝承されていた可能性も排除できない。口承で伝えられていたり、また現存しないテキストで語られていたのかもしれない。しかしその可能性は低い。司教選出のエピソードは、司教座教会にとっては、アニアヌスの権威をみずからの権威下に固定しようとした虚構である。しかし第1節で明らかにしたように、カロリング期の聖職者は、VA1の内容を忘れたわけではない。この聖人伝は、アニアヌスの聖遺物の正統性の証明書とも言うべきものである。その聖遺物の番人がみずからその内容に逆らってまで、司教座教会の代理人エウルティウスの「風下」に、アニアヌスを置く積極的理由があるとは思えない。

またサン＝テニャン側の聖人伝群は、司教選出エピソード以外の場面でも、エウルティウスの登場を許している。VA2では、エウルティウスの司教選出と事績に、1章があてられている。VA3では、エウルティウスは準主役である。彼は司教に選出され、その名声をしたってアニアヌスはオルレアンにやって来たのである。エウルティウスはアニアヌスを司祭に叙任し、サン＝ローラン聖堂を任せた。その後、アニアヌスの司教選出のエピソードに登場して死去する<sup>(88)</sup>。

サン＝テニャン教会は組織的にも精神的にも、司教座教会から独立性を保持していたはずだった。しかし聖人伝を見るかぎり、司教座教会への従属化を甘受し、アニアヌス崇敬の高揚にその力を借りている。したがってこの視点からみると、サン＝テニャン教会のある種の脆弱性が浮き彫りになる。サン＝テニャン教会は、なぜ「仮想敵」から、そのような支援を仰がざるを得なかったのか。その脆弱性の背景について、2つの可能性を検討してみたい。

ヘッドによれば、オルレアン司教区のいくつかの教会・修道院は、周辺

---

(88) VA2, p. 27, §1; VA3, pp. 34-36, §3-9.

諸勢力による権利・財産の篡奪の脅威にさらされていた。9世紀、フルーリ修道院の聖人伝作家アドレヴァルドゥスは、ベネディクトゥスの聖人伝のなかで、彼らに対するプロテストをおこなった。ベネディクトゥスは、モンテ＝カッシノ、サン＝ドゥニ、伯などから共同体を守った聖人として描写されている。ミシー修道院は9-10世紀に、ベルトルトゥスとレタルドゥスの2人の聖人伝作者を輩出した。彼らの聖人伝のなかでマクシムスは、オルレアン司教、俗人修道院長、伯、盗人から共同体を守ろうとした。いずれの聖人も、共同体を守るためには、ときには懲罰の奇蹟をおこなうことも辞さなかった。しかし紀元千年以降、彼らの守護聖人としての役割は、徐々に減少する。12世紀以降の共同体は、法律やそれを強制する法廷に守られ、聖人への依存度を弱める。それにしただって、奇蹟の型の主流は、懲罰から治癒に移行するという<sup>(89)</sup>。

したがって、彼らとアニアヌスの聖人像は対照的であるとも言える。ベネディクトゥスやマクシムスが、懲罰奇蹟をおこなって共同体の保護に奔走していたとき、アニアヌスは治癒奇蹟をおこなっていた。したがってサン＝テニャンの共同体は、彼に権利・財産の篡奪からの守護者としての役割を期待していなかったのである。事実、前述のように王や教皇は、むしろサン＝テニャン教会を保護していた。また司教も公然と圧力をかけることはなかった。ただ第2節でも述べたように、9-10世紀を通じて同教会は、伯を俗人院長として迎えることが多かった。彼らは共同体の財産を篡奪し、共同体の規律を弛緩させたかもしれない。しかしM・デ・ヨンクによれば、カロリング期の俗人修道院長は、必ずしも共同体の破壊者・篡奪者ではなく、改革を推進する者さえいた。サン＝テニャン教会の場合も、ウッドを除けば歴代の伯兼院長は、むしろ保護者として現れている。ユーク・ラベは、非自由人身分にあるサン＝テニャンの一聖職者が司祭叙

---

(89) Head, pp. 137-152, 181-187, 205-217 and 235-236. オルレアン司教区以外の例としては、P. J. Geary, *Furta Sacra: Thefts of Relics in the Central Middle Ages*, rev. edn (Princeton, 1990), pp. 85-86; 杉崎泰一郎『12世紀の修道院と社会』(原書房, 1999年), 37-44頁参照。

任を受けられるよう、彼を自由人身分に解放した（885年）。ロベール（後の王ロベール1世）は、エボンなる人物により篡奪されていた土地を、サン＝テニャン教会に取り戻した<sup>(90)</sup>。したがって脆弱性の背景として、周辺諸勢力による脅威を想定することはできない。

ところで前述のように、司教ワルテリウスはアニアヌスを含む聖人の祝日の遵守を、徹底させようとした。ヘッドはこの措置を、地方的聖人の崇敬を修道院から教区教会に拡大する試みと、解釈している。そしてこの措置の目的の1つは、「ノルマン人の侵入によって、社会生活の骨組みに生じてしまった大損害への対応」だと考えた<sup>(91)</sup>。つまり聖人のパトロネジに期待して、社会不安を乗り切ろうとしたのである。この「大損害」イメージの形成は、ヴァイキングの到来を天罰と考えた聖職者によるところが大きい。当時の俗人は、彼らと同じ考えを共有していたわけではなかった。したがって、ノルマン人の侵入が与えたかもしれない社会不安の程度については、研究者の見解は一致していない<sup>(92)</sup>。

しかしながら、過度にあるいは不必要にかもしれないが、聖職者がノルマン人を脅威に感じていたことは確かである。侵入の際に最初に被害に遭うのは、彼らであった。この点については、サン＝テニャン教会も意識を共有していただろう。後にサン＝テニャン・ブールと呼ばれるこの区域に、市壁がめぐらされたのは、1480年のことである。ノルマン人の侵入経路であるロワール川に臨んで建っているサン＝テニャン聖堂は、彼らの格好の標的であった。そして865年には、壊滅的な打撃を被ったと考えられて

(90) Eugues l'Abbé, *Diploma*, ed. by A. Vidier, in *[Le] M[oyen] A[ge]*, 20 (1907), 315-316; *Diploma*, ed. by A. Vidier, in *MA*, 20 (1907), 316-317; M. de Jong, 'Carolingian Monasticism: The Power of Prayer', in *The New Cambridge Medieval History*, II: c. 700-c. 900, ed. by R. McKitterick (Cambridge, 1995), pp. 622-653; Head, p. 145.

(91) Head, p. 50. 以下参照, 註(26)および(85), Geary, *Furta Sacra*, p. 84.

(92) J. L. Nelson, 'Introduction', in *The Annals of St-Bertin* (Manchester, 1991), p. 1; J. L. Nelson, 'The Frankish Empire', in *The Oxford Illustrated History of the Vikings*, ed. by P. Sawyer (Oxford, 1997), pp. 19-47.

いる<sup>(93)</sup>。サン＝テニャンの共同体は、宗教的な名声を博し、周辺諸勢力からの法的独立性を達成していた。しかし軍事的な脆弱性はいかんともしがたい。他方前述のように、司教座教会はワルテリウスによって修復された市壁に守られ、また司教自身が軍事力を保持していた。その対照性は明らかである。

皮肉なことにこの脆弱性は、アニアヌス崇敬の発展に寄与したと言える。異教徒の脅威に対して、サン＝テニャン教会およびその周辺住民は、聖人のパトロネジの顕現を期待し、その庇護を願ったに違いない。聖人伝の執筆もその思いの現れであろう。第2章で検討したように、都市防衛者としてのイメージは、アニアヌスがもっとも古くから帯びていたものである。その意味でこの聖人は、当時の社会の要請に、適合した聖性を備えていたのである。

## 結 論

紀元千年以前の聖アニアヌス崇敬の発展史のなかで、9-10世紀は急速な発展を経験した一時代であった。それは新しいイメージの付与を含む、質的な転換でもあった。これらの崇敬の高揚に寄与した勢力は、ローマ教皇、カロリング家やロベール家、オルレアン伯、オルレアン司教、そしてサン＝テニャン教会自身である。なかでもオルレアン司教とサン＝テニャン教会の寄与が、もっとも大きい。崇敬は両者の相克、協力など相反する要素をはらみながら、発展していった。聖人崇敬とは、その聖人の遺物をいただく共同体が、みずからの利益のために高揚させるもの、という単純な図式はここでは容認できない。

オルレアン司教座教会とサン＝テニャン教会の間には、「デリケートな確執」が存在した。権威の成熟に苦慮している司教座教会に対し、サン＝テニャン教会は伝統ある都市第1の聖人を擁していた。したがってアニア

---

(93) Biémont, *La collégiale*, pp. 12-13; Sejourné, p. 15; Debal, *Le plan*, p. 21; Gaillard and Debal, p. 17. 註25参照。

ヌス崇敬は、司教座教会から全面的支援を受けていたわけではなかった。

しかしおそらくは危機の時代に、この「確執」は封印された。アニアヌス崇敬の保護者として現れる司教のうち、アギウスとワルテリウスは、間違いなく危機の時代の人物であった。ノルマン人の侵攻にともない、当時の都市オルレアンは動揺していた。ではカロリング帝国最盛期の司教テオドゥルフスの場合は、どうであったのか。彼が就任した時点のオルレアンの状況について、われわれが保持している情報はきわめて限定されている。17世紀のオルレアン教会の年代記作家によれば、シャルル・マルテルに追放された司教エウケリウスとテオドゥルフスの間には、5人の司教が在位した。しかし年代記作家は、彼らの事績にほとんど筆を割いていないばかりか、3人については名前しか記録にとどめていない<sup>(94)</sup>。かつては、シャルル・マルテルがエウケリウスを追放して、オルレアン教会の財産を収公した。それにより、オルレアン教会は困窮したと信じられてきた。しかし篡奪者シャルル・マルテルのイメージは、近年修正されつつある。このイメージは、ヒンクマルスなど後世の聖職者が、過度に増幅したものだった。しかしながら、オルレアンの教会生活は、エウケリウスからテオドゥルフスの間、相対的に停滞期を迎えていたようである。8世紀中期、カルロマンとペパン3世の兄弟は一連の改革教会会議を主宰した。この会議のいずれにも、オルレアン司教の出席は認められない<sup>(95)</sup>。5人の司教は、記録には残っていないものの、教会生活の建て直しを志したのかもしれない。だ

(94) La Saussaye, pp. 276-280. この時期の司教の特定には、異なった見解も存在する。しかしいずれにしても、彼らの事績は重視されていない。V. Pelletier, *Les évêques de l'église d'Orléans depuis les origines jusqu'à nos jours* (Orléans, 1855), p. 26; E. Duchateau, *Histoire du diocèse d'Orléans, depuis son origine jusqu'à nos jours* (Orléans, 1888), p. 53; Berland, 'Les origines', 32 および註57参照。

(95) A. Dierkens, 'Carolus monasteriorum multorum eversor et ecclesiasticarum pecuniarum in usus proprios commutator?: Note sur la politique monastique du maire du palais Charles Martel', in *Karl Martell*, pp. 277-294; H. Wolfram, 'Karl Martell und das fränkische Lehenswesen: Aufnahme eines Nichtbestandes', in *Karl Martell*, pp. 73-75; I. Wood, *The Merovingian*

がその頻繁な交代は、改革の継続性を保証するものではなかったはずである。テオドゥルフスとともに、宮廷学識者としてシャルルマーニュの助言者を務めたアルクインは、サン＝マルタン修道院長に転出した。それは政権の功労者に、引退生活を保証するものであった。しかしテオドゥルフスのオルレアン司教転出は、異なった意味を持っていた。当時のオルレアンは、王権にとって重要な地域であるにもかかわらず、教会改革が軌道に乗っていなかった。テオドゥルフスはいわば現役選手として、司教座の復興を託されたのであろう。

危機の時代においては、サン＝テニャン教会側でも保護を必要とした。ノルマンの侵入から、共同体を守るためには、一方では聖人の奇蹟的な力による庇護に期待しつつも、現実には司教に頼らざるを得なかったのである。

聖人崇敬発展の大きな流れのなかで、アニアヌス崇敬はどのように位置づけられるのか。古代末期以来、西ヨーロッパの聖人崇敬は継続的に発展してきた。しかしP・C・ギアリが明らかにしたように、その動きを加速させ、社会における聖人のプレゼンスを定着させたのは、カロリング朝であった。歴代王権は、聖俗や階層を問わず社会のすみずみにまで、聖遺物を行き渡らせようとした。聖遺物は、各聖堂の祭壇に備えられ、宣誓の際の保証物、戦勝祈願のために用いられた。また聖人の事績は、民衆の道徳の手本とされ、民衆教化政策のもっとも有効な武器であった。さらに逆説的ではあるが、カロリング朝はその衰退でもって、再び聖人崇敬の発展に寄与している。公権力が解体していく過程で、人々は聖人の庇護にすがった<sup>(96)</sup>。アニアヌス崇敬の発展も、このような動向に連動していたと思わ

---

Kingdoms, 450-751 (London, 1994; repr. 1997), pp. 273-275; Heuclin, pp. 256 and 323-324; 佐藤彰一「カロリング初期ラングドック地方における伯職領の創出について——782年ナルボンヌ司教管区に関する裁判文書をめぐって——」見城幸雄先生頌寿記念事業会編『法制と文化：見城幸雄教授頌寿記念』（愛知大学文学会，1999年），48頁。

(96) Abou-El-Haj, pp. 7-32; ギアリ『死者と生きる中世』，76-96頁，青山『聖遺物の世界』。および註(50)で挙げた文献を参照。



れる。その急速な発展が開始したのは、まさにカロリング朝の盛期であり、ロベール家によって秩序が再び回復されるまで、発展が止むことはなかった。

カロリング王権は、社会のもっとも重要な紐帯を、聖人に提供させようとした。そのためには聖人崇敬を高揚させるだけでなく、管理することが必要になる。王権が危惧したのは、地方的聖人の隆盛である。そのなかには、由緒の怪しい聖人や、反体制的な聖人さえも含まれていた。また彼らへの尊敬が崇拜に転嫁し、多神教に流れるおそれも存在した。それに対し王権や教会当局は、非公認の聖人の祝日を祝うことを禁止したり、奉遷を許可制にするなど対策を講じた。その一方で彼らは、ローマ・カトリック的普遍的な聖人に対する崇敬を高揚させようとした。カロリング王権は、ローマ典礼を導入するなど、フランク教会のローマ的な改革を推進していた。したがって、普遍的聖人は教会の統一性の象徴であり、地方的聖人への対抗馬であった。事実、ペパン3世以来、普遍的聖人の聖遺物が、アルプス以北に流入し始める。しかしながら、カロリング朝の試みは、志半ばにして頓挫した。古代末期以来、地方的聖人はガリアの人々の素朴な宗教心に応えてきた。ローマ的な普遍的聖人が、彼らの心をとらえ始めるのは、紀元千年以降のことである<sup>(97)</sup>。本稿で検討した崇敬形態は、このような状況の縮図であった。都市オルレアンでは、地方的聖人のアニアヌスに対する崇敬が、古い歴史を誇っていた。カロリング王権の代理である司教は、普遍的な聖十字架崇敬を高揚させることで、それに対決を挑むことを求め

---

(97) Geary, *Furta Sacra*, pp. 44-86; P. Fouracre, 'The Origins of the Carolingian Attempt to Regulate the Cult of Saints', in *The Cult of Saints in Late Antiquity and the Middle Ages: Essays on the Contribution of Peter Brown*, ed. by J. Howard-Johnston and P. A. Hayward (Oxford, 1999), pp. 143-165; P. Riché, 'Les carolingiens en quête de sainteté', in *Les fonctions des saints dans le monde occidental (III<sup>e</sup>-XIII<sup>e</sup> siècle): Actes du colloque organisé par l'École française de Rome avec le concours de l'Université de Rome 'La Sapienza'*, Rome, 27-29 octobre 1988 (Rome, 1991), pp. 217-224; 歴史学研究会編『地中海世界史4 巡礼と民衆信仰』（青木書店、1999年）、44頁。

られた。しかし司教は抑圧が成功しそうにないと悟るや、その方針を現実的な対応に切り替えた。それはもう1人の地方的聖人、エウルティウスの力を借りることだった。都市オルレアンにとっての9-10世紀は、まさに普遍的聖人と地方的聖人の葛藤の200年であった。

(受理日 平成13年7月16日)

付記 本稿は史学会第98回大会(2000年11月12日)での口頭報告をもとに、加筆・修正したものである。